

の長子は大酒家であったので二番目分家杉村屋川島家の嫡男が絶えたので養子に出したので二男の精軒が跡継ぎとなった。

以下順次、^{四代}精軒、^{五代}慶治、^{六代}精迄を述べる。

(眼科開業)

江戸時代の家庭看護

山根 信子

我が国で看護という行為が職業化したのは明治時代になつてからである。それ以前は仏教が隆盛であった時代には看病僧が、キリスト教が伝来してからは奉仕女、あるいはシスター達の手によつて看護が行われていたが、それらは全地域、またすべての階層の人々にゆきわたる程、活潑ではなかつたようである。一般の家庭では民間伝承による看護、または医師の手による看護、あるいは医師の指導、指示のもとに家人が行うというのが一般的であつたらうと種々の文献から推察される。特に仏教が衰退して看病僧が激減し、キリスト教の弾圧によつて奉仕女達の活動がかくれてしまった以後、江戸時代には看護の殆んどが、家庭で家族あるいは使用人の手にゆだねられたといつてよいであらう。

しかし、その指導の実権は医師にあつたと考えられる。

その事実を物語ると考えられるものに江戸時代の看護書、「病家須知」がある。この書物からこの時代の看護の内容をみよう。豊富なさし絵があり、身のまわりの介護者は女性の絵で、診療、治療的な部分の介護者は男性（医師か？）で描かれている。

これによって、医師の担当部分と、家族の担当部分がわかるのではあるまいか。

「病家須知」は全八巻で、二巻の坐婆必研を含み、前六巻は一八三二年に、後二巻の坐婆必研は一八三〇年に、江戸に住む医師、平野元良によって著わされた。どれ位利用されていたかは判明しないが、現在も古書店に出まわっているところを見ると、かなりの数が出版されたのではないかと考えられる。

第一巻は総論で個人衛生、医師の選び方、相談のしかた、看病人の心得がとかれている。第二巻は食餌、第三巻は育児、第四巻妊娠分娩、第五巻伝染病、第六巻中毒、外傷他、第七・八巻は坐婆必研、でとりあげばばに与える書であるのでここでの説明は割あいする。

ひらがなまじりの大へん読みやすい書物で尚かつその内

容も、非常にやさしく絵入りで実用的に述べられており、万人の家庭にむけて書かれたと考えられるところから、この書でもって江戸時代の家庭看護の内容を知ることができると考えた。

スライドを見ながらこの時代の看護の方法を説明する。一番感心したのは、包帯法の見事さである。

（東海大学医療技術短期大学）